The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | マイノリティ教育ラボ 活動報告 : コロナ禍における学生のボランティア活動 |
| Author(s) | 秋山, みき; 砂原, なごみ; 田岡, 里彩 他 |
| Citation | 未来共創. 2021, 8, p. 318-329 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/83909 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マイノリティ教育ラボ 活動報告

# コロナ禍における学生のボランティア活動

**秋山 みき**（大阪大学人間科学部）
**砂原 なごみ**（大阪大学人間科学部）
**田岡 里彩**（大阪大学人間科学部）
**中西 美裕**（大阪大学人間科学部）
**井上 温子**（大阪体育大学非常勤講師）

## 目次

1．マイノリティ教育ラボとは
2．「つばめ」活動報告
　2.1 活動目的
　2.2 活動内容
　2.3 活動スケジュール
　2.4 F 高校でのオンライン支援
　2.5 地域のユースプラザでの取り組み
　2.6 活動の振り返り
　　2.6.1 必要な支援を必要な生徒に届ける難しさ
　　2.6.2 オンラインでの活動の特徴
　　2.6.3 居場所づくりの継続性の課題
3．コロナ禍における外国にルーツをもつ子どもたちへの支援―翻訳プロジェクトの活動報告―
　3.1 はじめに
　3.2 活動内容
　　3.2.1 大阪府教育庁「帰国・渡日児童生徒学校生活サポート」の「多言語家庭学習動画」翻訳
　　3.2.2 マイノリティ教育ラボのホームページにおける多言語情報提供
　　3.2.3 府立高校のメールマガジンの翻訳・音声化
　3.3 翻訳プロジェクト参加者の声
　3.4 おわりに

## キーワード

**マイノリティ**
**オンライン学習支援**
**学習材の翻訳**
**多言語による情報提供**
**コロナ禍のボランティア活動**

大阪大学大学院人間科学研究科 岡部美香；mioka@hus.osaka-u.ac.jp

## 1.マイノリティ教育ラボとは

大阪大学・人間科学研究科附属未来共創センターに設置されている「マイノリティ教育ラボ」は、障がい児・者、性的少数者、外国人、被差別部落出身者、貧困に苦しむ人々など、学校現場などで「しんどい思い」をしている子どもやその家族に寄り添いつつ、そのような思いをさせる社会の側を変えていきたいと願う大学生・大学院生や大学教員、学校教員や地域のボランティア、一般企業や地方自治体、NPO法人に所属する仲間たちで立ち上げたプラットフォームである。総勢80名（2021年2月24日現在）のメンバーが、地域の高校・夜間中学・公民館で学習支援活動や研究調査活動を行ったり、翻訳・多言語化プロジェクトや「食と演劇プロジェクト」といった独自の協働活動を展開したり、月1回の研修会で相互に学び合ったりしている。

本稿では、マイノリティ教育ラボの2020年度の活動について、特にコロナ禍におけるマイノリティ支援にかかわる活動を中心に報告する。

## 2.『つばめ』活動報告　（秋山みき・砂原なごみ・田岡里彩・中西美裕）

### 2.1 活動目的

2020年春、COVID-19の影響により、大阪府内の学校が休校を余儀なくされた。茨木市のF高校も例外ではなく、新学期が始まるはずだった4月～6月半ばまで、生徒たちは登校ができなかった。大学受験を控えた生徒、休校期間中の課題に一人で集中して取り組むことが困難な生徒にとって、先生や友達とのつながりが途絶えてしまう不安は大きい。また、家庭内で毎日長時間過ごすことになったり、何気ない相談をする相手がいなくなったりと、学習以外の面でも懸念されることは数多くあった。

そこで、私たち大阪大学マイノリティ教育ラボの大学生を中心に「つばめ」というグループを作り、学習支援と居場所づくりを組み合わせたオンラインでのサポートを行うことで、学校再開に向けた準備やつながりの確保を行うことにした。

しかし当初から、デジタルデバイスの確保や使い方、家庭内のネット環境など様々な要因によって、オンラインにアクセスできるか否かの分断が生まれていることが懸念されていた。また、大学生中心の活動になることによる責任や能力の

限界も予測された。それらを考慮し、つばめの活動における対象をまずは「オンラインにアクセスできる、緊急のサポートを要しない生徒」とした。消極的であるかもしれないが、高校教員あるいは地域の支援団体のリソースを、現在大きな困難に陥っている子どもやその家庭への支援に集中できるようにすることが狙いであった。

### 2.2 活動内容

本活動の具体的な内容は、Zoomを用いたオンラインでの学習支援と居場所づくり、そして、公式LINEアカウントの運用である。

まず、オンラインでの学習支援では、参加した生徒と大学生をブレイクアウトルームに割り振り、そこで課題や勉強に取り組んだ。休校期間中は生徒たちの生活習慣維持の意味も込めて、午前10:30 ～ 12:00の時間帯で、週に2回活動を行った。生徒たちが持ってくる教材は、主に高校から出された課題や受験勉強で、数学や社会、英語、物理など、様々な教科であった。外国にルーツをもつ生徒には、日本語学習の支援も行った。オンラインでの居場所づくり活動は、生徒たちが友人や大学生と自由に話ができる形式で行い、何気ない会話や相談ができるような緩やかなつながりを創れるようにした。こちらの活動は、学習支援活動と同じ時間帯で、週に1回行った。そのような中で、生徒の生活状況の確認や不安の共有も行った。F高校向けに始めたこれら活動を基盤に、6月半ばからは、茨木市のユースプラザと協力し、市内の中学生も活動対象者に含めた。なお、いずれの活動も、学校の再開状況に鑑み、実施頻度や時間帯を適宜調整した。

また、オンラインでの学習支援・居場所づくり活動以外の時間にも、大学生とつながることのできる場所を創るために、公式LINEの開設も行った。この公式LINEはつばめの大学生が運営を行い、学習会で取り組む問題の共有や、オンラインでの活動日の予告に使用した。

### 2.3 活動スケジュール

主な活動日程は表2-1のとおりである。

なお、公式LINEは5月に作成し、現在に至るまで随時使用されている。

この活動の後も、F高校には9月より週1回大学生が部活動指導員や学習指導員として対面での活動を行なっており、地域のユースプラザには10月より不定期で大学生が居場所づくり事業にボランティアとして参加をしている。

表2-1　活動スケジュール

| 実施月 | 回数（頻度） | 対象 | 内容 |
|---|---|---|---|
| 2020年5月 | 7回（週3） | F高校 | 学習支援・フリートーク |
| 6月 | 7回（週2） | F高校 | 学習支援・フリートーク |
| | 1回 | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 7月 | 2回（隔週） | F高校 | 学習支援・フリートーク |
| | 1回 | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 9月 | 2回（隔週） | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 10月 | 2回（隔週） | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 11月 | 2回（隔週） | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 12月 | 2回（隔週） | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 2021年1月 | 2回（隔週） | 地域のユースプラザ | 学習支援 |
| 2月 | 2回（隔週） | 地域のユースプラザ | 学習支援 |

## 2.4 F高校でのオンライン支援

F高校でのオンライン支援は、休校中の2020年5月から開始した。休校に伴って、生徒の学習のモチベーションが保てなくなることや生活リズムが崩れてしまうこと、学校によって保持されていた人とのつながりが失われることへの懸念から、支援が始まった。

参加者は、F高校に通う外国にルーツのある生徒が多かった。社会や理科を勉強するために、教科書のわからない漢字の読み方を整理する必要があったり、日本で大学受験を目指す生徒は日本語能力試験合格を目指した学習が必要であったりした。つばめの活動では、このようなニーズに対するサポートを行った。また、日本語学習を研究テーマにしている大学生がボランティアとして参加するなど、より充実した対策にも対応した。

学習支援だけでなく、生徒の居場所となることができるよう、勉強面以外でも信頼関係を築くことを目標とした。ここでは、大学生という立場を生かし、大学生活の話や進路についての相談など、生徒たちの将来の可能性を就職以外に広げるための話題も提供した。また、外国にルーツのある生徒に自身の国について話してもらうフリートーク企画では、生徒たちがいきいきと写真などを見せながら話し、交流することができた。さらに毎回予定された活動の時間が終わってから

も、時間を決めてZoomの部屋を開放し、生徒が残って自由にしゃべることができるようにしていた。その際は、近況を聞いたり雑談をしたりなどの交流を行い、大学生も生徒もお互いに打ち解けることができた。ここでは、食事の様子や生活リズム、家庭内での親との関係など生徒の普段の生活や悩み事などを聞くことができた。「昨日眠れなかった理由」など、生徒が吐き出せる場所になっていたことは居場所としての一つの成果であるが、それに対して大学生が対応に自信がもてないと感じることもあった。

## 2.5 地域のユースプラザでの取り組み

6月半ばからはF高校を対象に行っていた居場所づくり・学習支援活動を、地域のユースプラザに広げ、活動を継続することとなった。学習支援では宿題の解説や自習の質問に答え、時に気になる大学について一緒に調べたり、受験勉強への教科の優先順位について大学生からアドバイスをしたりした。一方居場所づくりでは、普段の学校生活の様子を話したりアイスブレイクのような簡単なゲームをしたりして親交を深めた。

また、高校生よりも中学生の方が、初対面の人とオンラインで交流することに抵抗があるのではというアドバイスをいただき、子どもたちと知り合うために、不定期で大学生が実際にユースプラザに足を運び、学習支援や居場所づくりをボランティアスタッフとして行った。ユースプラザでは、おしゃべりなど自由に過ごす時間と勉強をする時間に分けられており、子どもは友達と一緒に楽しんで取り組んでいるようだった。数名の生徒はここでつばめの活動に興味をもち、学習の場ではなく居場所としてフリートークや交流のゲームなどに参加した。

## 2.6 活動の振り返り

### 2.6.1 必要な支援を必要な生徒に届ける難しさ

F高校をオンライン支援の対象としていた時には、ターゲット層へのリーチが困難であった。当初予想していたのは学習意欲が高く進学も考えている生徒や、つながりがなく不安を抱えている生徒であったが、実際にはそのような生徒たちはあまり参加しなかった。逆に、参加してくれた生徒に対して、想定していなかった支援が必要になり、当初は運営する学生側が困惑してしまうことがあった。つばめの活動を学校に案内する際に目的意識のすり合わせが十分ではなかったことや、必要な支援に関する想像力の乏しさが一つの課題であったと考えられる。

また、生徒の居場所となれているのかどうかは大学生の私たちに明確にわかることではなく、参加してくれている生徒たちが嫌な思いをしていないか、ニーズに応えられているのかに毎回確信がもてず不安であった。おそらく「どのような場所が心地よいか」は生徒一人ひとり違うだろう。つばめの活動に取り組む以前は、漠然と現在孤独な状態にある人に、居心地がよいと思えるような場所を提供することができればよいと考えていた。しかし、実際に活動に参加してみると、参加者を均質なものとして捉えるそのような考え方は、個別のニーズが大切になるこのような活動にはそぐわないだろうと気づいた。外国人生徒のルーツを大切にすること、生徒のアイデンティティに関心を寄せることがどのようなことであるかを考えるきっかけができ、生徒と一緒に居心地のよい場所を探ることの重要性を実感することができた。

### 2.6.2 オンラインでの活動の特徴

コロナ禍という非常事態の中で始めたオンラインでの活動だったが、メリットとデメリットがあった。メリットは、対面での関わり合いが苦手な生徒でも家やユースプラザなど様々な場所から気軽に参加できる点である。カメラや音声のオンオフが選べたり、複数の生徒が参加していてもブレイクアウトルームを作成して個別で話すことができたりと、対面での活動よりも柔軟に参加生徒の希望に合わせた対応ができた。デメリットとしては、家庭のネット環境に課題がある生徒や、Zoomの扱いに慣れていない生徒は参加しにくいことと、一度入室すると退室しにくい雰囲気があることがある。前者は、学校やユースプラザと連携し、対面での支援も併せて行うことで改善できると考えられた。後者は、あらかじめ「いつでも抜けてもらって大丈夫！」と声掛けをし、生徒の意思を尊重できるように工夫してきた。

当初は対面の活動のほうが生徒の気持ちに添えるのではないかと思っていたが、オンライン特有の適度な距離感を保ち活動することも、生徒のニーズを満たす可能性の一つであると感じた。地域のユースプラザとの連携を開始する際、参加する可能性のある生徒と対面での関係性を構築するために足を運んだが、実際にはユースプラザではすでに生徒同士、生徒と現地スタッフとのつながりができており、逆に私たちの活動の特徴が見えづらくなってしまった。現在利用してくれている生徒から、オンラインだから参加できるという意見も聞いていることから、オンラインという距離感は、それが心地よいと感じる生徒にとっては居場所とな

り得ることがわかった。

### 2.6.3 居場所づくりの継続性の課題

居場所をつくること、居場所を保ち続けることの難しさも学んだ。ユースプラザでは、現地にて生徒の放課後の居場所が確保されている一方で、その空間には参加しづらい生徒もいるのではないか、そうした生徒こそがオンラインでの居場所を求めているのではないかと考えていた。しかし、オンラインでつばめの活動に参加してくれる生徒の数は決して多いとは言えない現状があり、運営する学生側のモチベーションの維持が困難になっていたことは認めざるを得ない。継続した関わりの必要性を認識しつつも、スケジュールが忙しくなると毎回参加することができなかったこともあった。居場所づくりの性質として、生徒に対して毎回の参加を強制することはできない一方で、現在も定期的に参加してくれている生徒はいる。活動の効果や負担を考えると、利用者の減少は活動終了を検討する要素になり得るが、つばめの活動に居場所を見出してくれた生徒が1人でもいる以上は必要とされなくなる日まで継続したいという気持ちとの葛藤もある。その葛藤のうえに居場所づくりを含めた社会貢献活動はあるのではないだろうか。これからも子どもが来たいと思った時にいつでも来られる場所を提供するために、より多くの子どもにとって安心していられる場所を用意するうえで私たちに何ができるかを考えていきたいと思う。

## 3．コロナ禍における外国にルーツをもつ子どもたちへの支援 ―翻訳プロジェクトの活動報告―　（井上温子）

### 3.1 はじめに

新型コロナウィルス感染症の拡大に伴う2020年3月2日からの全国一斉休校という今まで経験したことがない状況に、学校だけでなく家庭や社会も混乱をきたした。外国にルーツをもつ子どもたちにとっては、コロナ禍以前の学校現場でも言葉や文化の壁により疎外感をもち、なかなか学校に馴染めないというケースは少なくなかったはずである。それが、この一斉休校により一段と疎外されたような気持ちになったのではないかと危惧される。そこで私たちは、自分たちができる翻訳というボランティアで、このような子どもたちの学習を支援するプロジェ

クトを始めた。以下では、総勢42人が参加しているこの翻訳プロジェクトの一年間の活動を振り返るとともに、今後の活動への抱負をまとめる。

### 3.2 活動内容

外国にルーツをもつ子どもたちへの学習支援として、以下の3つについて、多言語での翻訳提供を行っている。

#### 3.2.1 大阪府教育庁「帰国・渡日児童生徒学校生活サポート」の「多言語家庭学習動画」翻訳

大阪府教育庁小中学校課が作成した学習教材「力だめしプリント」の動画（小学校6年生算数5問）に対して、その「問題文」と「動画のせりふ」を9言語（英語、タイ語、ベトナム語、ポルトガル語、マレー語、ロシア語、ハングル、中国語、クメール語）に翻訳し、録音が可能な担当者は音声での翻訳提供も行った。この活動は、2020年春以来の新型コロナウィルス感染症の拡大に伴う学校一斉休校で、外出自粛を要請された児童生徒、とりわけ「日本語」の習得に困難を感じる外国にルーツをもつ子どもたちの家庭学習を支援し、また、その教育に携わっている現場の教師や保護者にも、このツールを活用してもらえるようにと始まったもので、いまも活動を継続している。

なお、大阪府教育庁市町村教育室小中学校課の松田一雄指導主事からは、この活動に対して次のようなコメントをいただいている。

> コロナ禍の学校休業中の対応として、学習動画等を作成するも、多言語化はできていなかったところ、大阪大学のお力で、学習動画等6教材を9言語で翻訳していただき、大阪府のHPにアップできました。
>
> 学校現場からは、これまで母語で学ぶことが難しかった子どもが、これらの教材により、学びを深めることができたなどとても感謝されています。

以下に、この翻訳に関わったメンバーを紹介する。（以下はすべて2021年2月14日現在のメンバー。敬称略。学部・研究科のみで大学名がない学生・院生は大阪大学所属）

- 英語：副島明日香（人間科学研究科院生）、川上千晴（外国語学部学生）
- タイ語：スワンナクート・パッチャラーパン（言語文化研究科院生）
- ベトナム語：Phạm Phi Hải Yến、Bùi Khánh Linh（言語文化研究科院生）、近藤美佳（言語文化研究科教員）
- ポルトガル語：齋藤真里奈、川上千晴（外国語学部学生）
- マレー語：松本みなみ（言語文化研究科院生）、AHMAD SYAHIM AIMAN BIN CHE JALAL（近畿大学理工学部学生）、NUR FARHAN IDRAKI BIN ASRI（兵庫県立大学工学部学生）、TASNEEM MADIHAH BINTI MOHAMAD KHAIDHIR（立命館大学理工学部学生）、AUVENDRA JAIRUN（中京大学工学部学生）
- ロシア語：パンクラートワ・スネジャーンナ（言語文化研究科修了生）
- ハングル：白琇晶（金剛学園小学校教諭）
- 中国語：張欣宇、法卉（人間科学研究科院生）、岸田紗耶、後藤真笑、小菅萌果、端杏菜、畠山依緒里、小田陽子、中津大介、山嵜由真、宮田優香（外国語学部学生）、黄晓凤（研究生）、面出望、方逸韵、李筱、申慧敏、马瑜瑶（言語文化研究科院生）、中田聡美（言語文化研究科教員）
- クメール語：クイ・シェンキアン（言語文化研究科院生）

2021年1月中旬には、小中学校課から新たに学習教材「力だめしプリント」の動画（小学校算数3問と中学校数学4問）の翻訳依頼があった。2月後半には、10名の留学生が翻訳ボランティアに新たに加わり、共に翻訳作業を行うことになった。

### 3.2.2 マイノリティ教育ラボのホームページにおける多言語情報提供

マイノリティ教育ラボのホームページにおいて、外国にルーツをもつ子どもたちの学習教材や新型コロナウィルスに関わる情報を、13言語（やさしい日本語・英語・タイ語・ベトナム語・ポルトガル語・マレー語・ロシア語・ハングル・中国語・スペイン語・タガログ語・ネパール語・クメール語）において収集し、掲載している。

活動に関わったメンバーを紹介する。

- 英語：川上千晴

・ ベトナム語：Phạm Phi Hải Yến、Bùi Khánh Linh、近藤美佳
・ ポルトガル語：齋藤真里奈、川上千晴
・ マレー語：松本みなみ、AHMAD SYAHIM AIMAN BIN CHE JALAL、NUR FARHAN IDRAKI BIN ASRI、TASNEEM MADIHAH BINTI MOHAMAD KHAIDHIR、AUVENDRA JAIRUN
・ ハングル：白琇晶
・ 中国語：岸田紗耶、後藤真笑、小菅萌果、端杏菜、畠山依緒里、小田陽子、中津大介、山嵜由真、宮田優香、黄晓凤、面出望、方逸韵、李筱、申慧敏、马瑜瑶、中田聡美
・ タガログ語：Voluntad, Raffaello Riley Catapang（工学部学生）

### 3.2.3 府立高校のメールマガジンの翻訳・音声化

大阪府立西成高校の教員が発行する生徒・保護者宛てのメールマガジンを中国語とポルトガル語で音声録音して提供した。メールマガジンの内容は2020年度入学式（6月15日）の案内文などであった。中国語は法卉、ポルトガル語は大川ヘナン（人間科学研究科院生）が音声録音を行った。

## 3.3 翻訳プロジェクト参加者の声

2020年9月24日、翻訳プロジェクトに参加しているメンバーに、上にコメントを寄せてくださった松田指導主事とマイノリティ教育ラボ・副代表の岡部美香教授（人間科学研究科）が加わり、オンラインの交流会を開催した（当日来られない人はメールでコメントを寄せるという形で参加した）。そこでは、翻訳をしてみた感想だけでなく、翻訳に関連する具体的な課題や留学生支援に対しての思いなどについて活発な意見交流が行われた。以下に、交流会で出た感想や意見を簡単にまとめたものを一部紹介する。

【翻訳をしてみた感想】
・ ひとりで翻訳をしていると孤独である。
・ 家庭学習教材について、子どもの視点に立つことが必要。（一輪車を用いた問題文があるが）外国では一輪車は一般的ではない。
・ （翻訳に）どこまでクオリティを求めるか、（困っている子どもに少しでも早く支援を行うには翻訳を仕上げる）迅速性も必要（だが、両立は難しい）。

・国によっては、男性と女性、子どもと大人でしゃべる言葉が異なることがわかった（動画の翻訳）。

【留学生支援について】
・留学生から、なかなか日本人の友人ができない、と聞く。
・（日本で仲間を作るためにも）留学生に、この翻訳プロジェクトにどんどん参加してもらって交流してはどうか。

【対訳（原文と訳文を対照できるよう並べて記す）について】
・対訳について3点の利点がある：①外国にルーツのある人々にとっては、日本語の勉強にもなる、②翻訳者にとっては、あとで修正しやすくなる、③日本語話者にとっても、役所での給付金に関することなどがわかりやすく説明されている。

## 3.4 おわりに

新型コロナウィルス感染症の拡大という全世界的な災厄の中、留学生や日本人の学生・院生が自粛による不便や孤独と向き合いながら、多忙な学業の傍ら、外国にルーツをもつ子どもたちのために支援活動を行った。また、勤務校のオンライン授業の準備に追われる中、協力をいただいた小学校教諭や大学教員もいる。遠くアメリカやブラジルに留学中の学生や、他の大学の留学生からも協力を得ることができた。

自分たちが翻訳したものが、公共機関のweb上に公開され活用されることは、学生、院生、留学生にとって大変やりがいがある活動である。しかし、在宅でのボランティア活動なので担当者が孤独に陥りやすく、プロジェクト参加者どうしの横の連携を今後どのように構築していくかが課題である。今後もこの活動が継続され意義あるものになるように、このようなかたちで活動報告を記録に残すことがその一助になるなら幸いである。

## 注

1　マイノリティ教育ラボのHPより https://www.minoritylab.net/info （2021/02/24アクセス）

2　大阪府教育庁「帰国・渡日児童生徒学校生活サポート」WEBページは次の通り。http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/kikokutoniti-sapo/index.html (2021/02/24アクセス)

3　「力だめしプリント」は次のURLを参照。http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/chikarasyoukai/index.html (2021/02/19アクセス)

4　「マイノリティ教育ラボ」の多言語情報のページは次の通り。https://www.minoritylab.net/multiplelanguage　(2021/02/24アクセス)